

【日本腎臓学会主催】

## 第5回 研修医のための 腎臓セミナー



### ●腎臓に興味をもつ150名が集合

学会主催で若手医師を教育する、そんなセミナーが行われている。それは日本腎臓学会 卒前・卒後教育委員会による「臨床研修医のための腎臓セミナー」。2007年8月18日～19日、東海大学校友会館（東京都霞ヶ関）にて開催された。

このセミナーは初期研修を補足する目的で2年前から始められ、今回で5回目。参加者は、初期研修医を中心に、後期研修医や卒後10年以上の医師も含め全国各地から約150名が集まった。腎臓専門医を目指す医師は約半数で、他科志望医や診療所勤務医などバックグラウンドは多様であった。何度もくり返し参加している医師もあり、定員を超える参加申し込みがあったという。

セミナー発起人の今井裕一医師（愛知医科大学）によれば、「卒後教育はそれぞれの研修医や研修病院にゆだねられており、まとまった教育を受けられる機会は少ない。他の学会でも若い医師を教育する試みはされているが、腎臓学会は特に教育体制が整い定着している」とのこと、それがこの人気ぶりからもうなずける。

### ●腎診療での考え方がわかるプログラム

プログラムは「水・電解質、酸塩基平衡異常」「腎炎・ネフローゼ」「腎生検」「二次性腎疾患」「CKD（慢性腎臓病）」「腎性貧血」「血液浄化療法」と多岐にわたった。日常診療に役立つ基本を学び、知識をアップデートしながら、腎疾患の現在の治療・動向もつかめるような内容であった。

メインのセッションは、1テーマごとに症例提示と講義を組み合わせる構成で行われた。1人目の講師の症例提示のなかで、いくつかの「問題」についてグループディスカッションを行い、その後、2人目の講師が症例解説を交えながら必要知識の講義を行った。



↑セミナー初の試みとして「何でも相談室Meet the Mentor」の時間が設けられた。講師と1対1でキャリア等に関する相談ができるもので、多数の参加者が相談、時間いっぱい話し込んだ。

「問題」は、例えば糖尿病と腎炎の合併症例なら、「この症例の糖尿病の病型は何か?」「浮腫の原因は?」「腎生検の所見・診断は?」「治療方針は?」などで、それにより担

当医の思考過程をたどっていくことができる。時折、専門医でも悩むような問題が混ざり、腎臓の基本から応用まで知識をフル稼働させて考えることになったようだ。また、提示症例には、レジデント向け書籍のアルゴリズムでは解決できないようなものや、意外な原因が隠されたものなど、一筋縄でいかない例もあり、参加者をうならせ、専門家である講師陣まで夢中にさせた。

そのほかに、「Pro & Con」として、「専門医に博士号（研究歴）は必要か?」「病腎移植はすべて禁止すべきか?」の2つのテーマについて、proとconの立場から演者が話をしたうえでグループディスカッションを行うプログラムも組まれ、風潮などに紛らわされずに自分の頭で考えるようにと強調された。

### ●教育熱心でキャラクターの際立つ講師陣

セミナーの人気の秘密の1つは、教育のために駆けつける30人以上もの講師陣にあるようだ。今回の世話人でありプログラムを作成した渡辺毅医師（福島県立医科大学）が「出演者のキャラクターを重視した」と言う通り、講師は独特の話術で惹きつけたり、笑いどころを用意していたりと、飽きさせることがない。もちろん内容についてもわかりやすく伝える工夫が凝らされ、さらに、研修医の思い込みを覆すような臨床上の考え方、語呂合わせを使った覚え方など、現場の技がふんだんに伝授された。また、ディスカッションを行うグループにはタスクフォース講師が1人ずつ付き、手厚い指導體制がとられた。

### ●参加者の声と、これから

参加者からは「自分たちの知りたいことを考えたプログラムであり満足している」「普段落ち着いて勉強できないので、2日間集中して学べたことは貴重だ」「将来どういう道があるか、を多くの先生に触れて見られるのがよかった」「自分の病院に腎臓専門医がないので、スタンダードがわかった」などの声が聞かれ、収穫は多かったようだ。終了時には「濃密な2日間で頭の中が溢れそう」と言いながらも満足そうな顔が多く見られた。

渡辺医師が「腎臓病や透析患者が増えている今、腎臓を診られる医師がどこにでもいるように養成していくことは腎臓学会の社会的使命」と語っていたが、それを果たしていくように見えるこの活動の、今後の発展に期待したい。なお、次回セミナーは2008年2月に大阪で開催される予定である（詳しくは後日腎臓学会ホームページに掲載される）。  
（編集部 保坂早苗）